

この作品に出会ったあなたは
あなたの内なる優しさと向き合うでしょう

人はみな 愛おしいのだ



さんわーくかぐやの

かぐや びより

監督・撮影・編集
津村和比古(J・S・C)

神奈川県藤沢市

小田急線善行駅から徒歩10分足らず、
起伏の多い住宅街の一角に
「さんわーくかぐや」がある。

築50年ほどの簡素な建屋

裏手の傾斜地には竹林が広がる。

竹林を下るとセルフビルドのアトリエと作業棟。

その先には、緑豊かな庭が視界に広がる
ここが通所メンバーたちの「くらし」の場。

社会に馴染めなかったり

生きづらさを感じている人たちの個性が寄り添う。

農作業に励み、創作活動を愉しむ

庭には柿・梅・ビワ・キウイ・花梨などが実り

畑で収穫した季節の野菜が、食卓に並ぶ。

さんわーくかぐやは生きる場所。

愉しみながら、生きる力を育む場所。

かけがえのない 我が子を愛する
「母の心」がいつも傍にあった



2022年公開!

藤田慶子さんは
福祉の世界とは縁のない
平凡な主婦であり
2男2女の母だった
長女が14歳で
統合失調症を発症

母はほとんどの時間を
長女と共に過ごすようになる
生と死の狭間を生きているような
不安定な日々

2008年春 彫刻家の長男と共に
彼女のための居場所を作った
それが「さんわーく かぐや」
しかし 30歳の誕生日を目前にして
長女は突然 自ら旅立ってしまった
我が子を守ることが出来なかった
母の悲しみ 後悔と葛藤
以来 彼女と共に生きた時間が
内なる炎となり 糧となって
かぐやの母として 日々を生きている
「いのち」を育む場所を
大切に守っている

僕がお金を好きじゃないところから、
かぐやはスタートしています。
お金を稼ぐために生きることは、
豊かな暮らしではないと思っています。
働くこと、アートをすること自体が
生きている価値につながる。
そんな暮らし方を求めています。
(理事長 藤田靖正)

●監督・撮影・編集＝津村和比古(J・S・C)
チベットから単独でインドへ、10歳の難民少年を描いた、ドキュメンタリー映画「オロ」で第21回日本映画撮影監督協会賞受賞。第62回式年遷宮公式記録。NHKなどで美術、音楽、世界紀行、ドキュメンタリー作品多数。1946年東京生まれ。

●音楽・主題歌＝たいじのうた [Birth] 作詞・作曲・歌＝おおたか静流
「早起きのダンス」「プブルンパー」＝ロバの音楽座 松本雅隆

●協力：NPO法人 さんわーく かぐや 藤田慶子・藤田靖正・秋田晃・山口洋子

●整音：滝澤 修 ●画：萩原ありさ ●題字：小林大真 ●宣伝美術：鈴木衛 ●広報：澤野亮介 ●ラインプロデューサー：柴田里芽
●制作：(有)津村和比古事務所 〒145-0063 東京都大田区南千束1-3-15 (Tel&Fax) 03-3727-9740 (携帯) 090-1424-4775
●制作補＝津村宣子
2022年/105分/HD/16:9/日本語/ドキュメンタリー



さんわーくかぐやの
かぐや
ひより



癒し
癒され
大ちゃん
洋子さん



困難さを
ゆるやかに
楽しんでいる
親子です



悲しいことを
無言で乗り越えてきた
エリカさん



かぐやの
キング・オブ・ダンス
前田さん



もう
帰っちゃうの？
原さんは人が好き

田島征三 (絵本作家)

かぐやには素晴らしい竹林があるので
「かぐや」という名がついているのだが
実はあの輝夜姫(カグヤヒメ)伝説の
本当の舞台であることは知られていない。
本当のかぐや姫は月には帰らず
今もここに住んでいるんだよ。
姫に魅せられて集まった殿方もも
いまだにここにいたんだね。
この映画は、
あの昔話の登場人物の末裔たちの
ドキュメンタリーなのでね。

山本ふみこ (随筆家)

みんなの顔が見たくなる。
会いたくなる。
ちょっと落ち込んだら、
かぐやに行こう！
笑わせてもらおう！
この星には、
こんな居場所があるんです。

伊集院要

(NHK 福祉番組プロデューサー)

普段忘れかけているもの。
目先のことで右往左往している
現代に生きる者たちにとって、
大切なメッセージが
込められているように思います。
作品の中に溢れる、
「喜びたいときに喜び」
「悲しいときに悲しむ」という
当たり前のことが、
とても貴重なことなのだ
ということがわかりました。
「かぐや」を好きであればあるほど、
その背後にある、
社会の歪みにも、自然と思いが至ります。

直井恵

(うえだ子どもシネマクラブ・切り絵作家)

福祉とかそんな切り口ではなく、
みんなが思い描く理想の社会がここでは
ひとつひとつ実現されているのでしょうね。
一人の個人として、悩み、不安を抱えながら、
人の温もりを求めながら生きていて、
ダメなところも丸々愛おしいんだと、
すべての人に向けたメッセージのようです。

Yuta Arima

(映像作家・仏アングレーム在住)

強く感じたのは、このような場をつくり、
来るもの拒まず、去るもの追わずの精神で、
人々と分かち合うことの、尊さです。
「うらやましい、自分もそうなりたい、
そのようなことのできる人間になりたい」
という気持ちを掻き立てたこの映画には、
観た人の人生観を変える力があります。